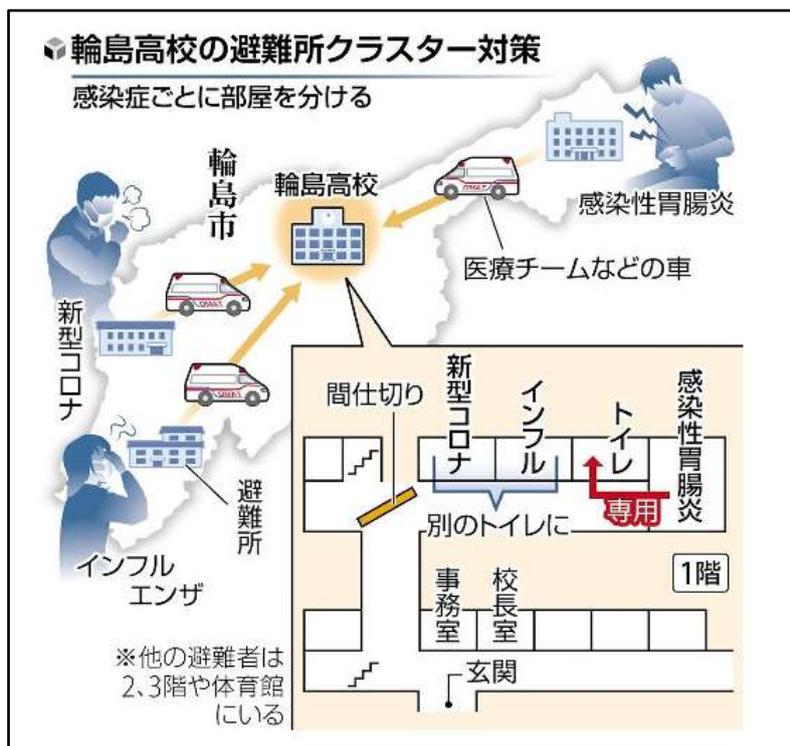


避難所「クラスター封じ」の工夫、感染した避難者を疾患ごとに部屋分け…輪島高校に集約して療養

1/12 読売新聞

能登半島地震の被災地・石川県輪島市の県立輪島高校に開設された避難所では、「新型コロナ」「インフルエンザ」「感染性胃腸炎」に感染した避難者を、疾患ごとに別室に分けるようにした。避難所クラスター（感染集団）を防ぐ狙いがある。市内の他の避難所で感染が分かった人も受け入れ、災害派遣医療チーム（DMAT）などの支援の下で療養できるようにしている。（松田俊輔）

輪島高校に集約し療養



同高の平野敏校長によると、この避難所には350人余りが身を寄せている。市内で発熱や下痢などの症状を訴える人が出始めたことを受け、避難所クラスターを警戒。7日から、校舎1階奥の教室と視聴覚室の計3室を、それぞれ〈1〉新型コロナ〈2〉インフルエンザ〈3〉ノロウイルスなどの感染性胃腸炎——の感染者用に充てることにした。体育館や別の階の教室にいる他の避難者と生活空間を離れた。

DMAT事務局（東京都立川市）から派遣された看護師と協議して決めた。輪島市内の他の避難所で感染が判明した人も集めている。

11日時点で、新型コロナ20人、インフルエンザ1人、感染性胃腸炎3人の計24人が専用室で過ごしているという。

感染性胃腸炎用の部屋の隣には、専用の臨時トイレ室も設け、他の感染者と使うトイレを分けるようにした。新型コロナやインフルと、感染性胃腸炎の多重感染を避けるためだ。

6日にこの避難所を訪れた日本環境感染学会理事の泉川公一・長崎大教授は「避難所には重症化リスクの高い高齢者も多く、クラスター対策は重要。感染症ごとに部屋を分け、かつ市内の感染者を集約する取り組みは、限られた医療資源を有効活用する意味でも一つのモデルケースになる」と評価している。